

1A14

大学の生物学の講義を通して「高校生物」を考える

西郷 孝 (生物教育研究所・名城大学農学部非常勤講師)

愛知県の県立高校を退職後、非常勤講師として大学で高校「生物」の内容を中心とした講義を担当してきた。大学の講義と学生の反応を通して「これまでの高校生物」を振り返り、問題点やその対策について考えてみる。

農学部では「生物学Ⅰ」「生物学Ⅱ」の2講座を担当しているが、対象学科(募集定員110名)のほとんどの学生が両講座とも受講している。新型コロナウイルスの感染拡大によって2020年度の講義は全面リモートとなり、大学もネット環境を急ピッチで整備したが、回線数などの関係でリアルタイム双方向の講義ができない大学も多かった。高校でもネット環境が整備されたが、「学習に関する調査アンケート」を行ったところ、今年度の大学入学生については、整備が間に合わず活用できなかった場合もあったことが示された。

毎回の講義で配布する質問票に「問題集はないのですか」、「大学での試験勉強の方法が分かりません」、「昨年のテスト問題を教えてほしい」の「質問」がある。高校までは、問題集があってそれをやればテストで良い点が取れる、という学習が定着してしまっていることがわかる。また、「どこまで覚えたら良いのか」、「コドン表は全部覚えるのか」という質問も毎年ある。「生物」は暗記科目であると考えていて、暗記中心の学習が定着してしまっている学生も多い。また、講義で「この辺のところは詳しく分かっていない」というと、「分かっていないことがそんなにあるとは思っていなかった」という感想が書かれることも多い。教科書は「解明されている知見」をもとに書かれているので、生命現象はほとんど解明されていると勘違いしてしまう生徒も多いようだ。さらに「進化」の視点が欠落している学生が多くいると感じることもある。今年度、現役で大学に進学した1年生は、2020年4月の高校入学で、「コロナ」の影響を3年間丸々受けた学年なので、ウイルスや感染防止対策についての知識はかなりあると予想されたが、調査の結果は知識の乏しい学生が多いことを示していた。